



Osaka Gakuin University Repository

Title	岡松参太郎と石坂音四郎 Santaro Okamatsu and Otoshiro Ishizaka
Author(s)	濱口 弘太郎 (Kotaro HAMAGUCHI)
Citation	大阪学院大学 法学研究 (OSAKA GAKUIN LAW REVIEW), 第 51 巻 第 1 号 : 21-35
Issue Date	2024.9.30
Resource Type	Data/ 資料
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

〈資 料〉

岡松参太郎と石坂音四郎¹⁾

濱 口 弘太郎

1 はじめに

法学の学説がどのように継承され、発展し、現在の形になったのかは非常に興味深いテーマである。特に、民法学説史においては、法典編纂後、比較的近い時期に、いわゆる学説継受期が到来したとされる²⁾。この「学説継受」は、「歴史的・比較法制的手法の無視、日本民法典とドイツ

1) 「石坂」の発音は「いしざか」とするのが一般的であるため、本稿の英語版目次も「Ishizaka」とした。もっとも、「岡松参太郎文書」N10「自保 雑(12)ノ一 石坂関係書類」の12及び14-1から14-4まで（いずれも「(書簡／故石坂教授の注文した書籍・雑誌の取消の件)」は、「石坂」を「Ishisaka」としている。これらの書簡は、1917年に、石坂が急死したため、岡松がベルリンやアムステルダムに宛てて、石坂の注文の取消しを求めたもの（おそらく、その草案）であり、英語でタイプされている。このような資料の存在を考えると、当時は、「いしさか」と発音していた可能性も否定できない。

2) 星野英一「民法学史(1)」法学教室 8号37頁（1981年）39頁は、わが国の民法典編纂後、学者の関心が専らその解説や注釈に向けられた時期を「僅か十年余」とする。

法理論との同列化、直結現象」³⁾とされ、民法典施行当時の学説とは「解釈論の断層」⁴⁾を示すとされる。もちろん、学説継受期の学者も、前の世代から何も受け継いでいない訳ではなく、その意義は相対的に捉えるべきであろう。

学説継受期を代表する民法学者に、岡松参太郎と石坂音四郎がいる。岡松は、学説継受前と継受後、両方に属するとされ、この点でも、大変興味深い。石坂は、その岡松の弟子であり⁵⁾、「日本民法学の山脈における最高峯」⁶⁾と評され、その著書は「ドイツ民法論の学説継受を完成し、同時に、現在の解釈論の基礎をつくり上げた」⁷⁾とされている。本稿では、両者の関係を示す資料として、織田萬が岡松に送った書簡を紹介する。この書簡は、「岡松参太郎文書」⁸⁾にB77「書簡／石坂・岡松の東京大学への就職の件」として収録されている。なお、書簡の読解に当たっては、大阪学院大学法学部の横山輝樹先生から多大なご教示を得た。この場を借りて、感謝申し上げる。もとより、読解の誤りについては、執筆者がその責めを負うことについては言うまでもない。

以下、本件書簡の関係者について、岡松を中心に紹介した後、本件書簡を取り上げることとする。

3) 北川善太郎『日本民法の歴史と理論』(日本評論社、1968年)133頁。

4) 北川・前掲注(3)『日本民法の歴史と理論』134頁。

5) 末川博「法学会の巨星岡松参太郎先生の思い出」書斎の窓269号45頁(1977年)48頁(書斎の窓3号(1953年)の再掲。)は、石坂と雄本朗造は「岡松先生と最も親しい師弟の関係にあった」「石坂、雄本の両先生は岡松先生の最も敬愛された学者である」としている。

6) 石田喜久夫「石坂音四郎」法学教室181号98頁(1995年)。

7) 北川・前掲注(3)『日本民法の歴史と理論』135頁。

8) 岡松参太郎文書は、岡松家旧蔵書資料が早稲田大学図書館に寄贈され、マイクロフィルムによって公開されたものである。詳細については、浅古弘「解説」早稲田大学図書館・早稲田大学東アジア法研究所編『早稲田大学図書館所蔵岡松参太郎文書目録』雄松堂アーカイブズ(2008年)、浅古弘「岡松家旧蔵資料の公開」浅古弘・和仁かや編『岡松参太郎の遺緒』(成文堂、2024年)1頁を参照。

2 本件書簡の関係者

(1) 岡松参太郎

民法学者であり、後述の『無過失損害賠償責任論』や台湾旧慣調査で知られる。岡松は、明治4年に、延岡で生まれた⁹⁾。1891（明治24）年、帝国大学法科大学英法科に入学し、1894（明治27）年、これを首席で卒業し、大学院に進学した（債権法専攻）。

ところで、1891年は、穂積八束による「民法出テ、忠孝亡フ」が発表された年であり、翌1892（明治25）年には、民法及商法施行延期法が成立している。1893（明治26）年には、法典調査会が設置され、旧民法典の「修正」作業が開始された。この明治民法典編纂に岡松も関与したのではないかと「推理」もあるが、現時点で公開されている資料には、これを明確に裏付けするものはないようである¹⁰⁾。

1896（明治29）年3月、「民法中修正案」（明治民法の前3編を定めるもの）が衆議院、貴族院にて可決される。岡松は、井上密、織田萬、高根義人とともに¹¹⁾、新しく開設される京都帝国大学法科大学の教授となるべく、同年4月14日、ドイツ、フランス、イタリア3国への留学を命じられる。同月27日、明治29年法律第89号として、「民法中修正ノ件」が公布される。翌月に当たる5月18日、岡松の『民法理由上巻』（総則）が発行される。

岡松は、1899（明治32）年7月¹²⁾に帰朝し、同年9月11日、京都帝国

-
- 9) 熊本出身とする資料もあるが、ここでは、浅古・前掲注(8)「岡松家旧蔵資料の公開」6頁によった。
- 10) 藤野奈津子「岡松参太郎の学問と法－その『留学』まで－」浅古弘・和仁かや編『岡松参太郎の遺緒』（成文堂、2024年）71頁
- 11) 「在外研究発令に際してこの4名は、西園寺公望文相から特に自宅の晩餐へと招かれ親しく激励を受けたと伝えられている」（京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史部局史編1』（京都大学後援会、1997年）242頁）。
- 12) 京都大学文書館の「京都大学 歴代総長・教授・助教授履歴検索システム」によった。

大学法科大学の開設と同時に、その教授に就任した。京都帝国大学法科大学は、高根義人や織田萬の主導の下、演習や卒業論文の義務化、在学年限を4年から3年に短縮するといった、改革に着手することとなる¹³⁾。それとともに、同年12月、岡松は、臨時台湾土地調査局嘱託となり、台湾への関与を始める。さらに、1901（明治34）年に臨時台湾旧慣調査会が発足すると、同年12月、岡松はその第一部長に就任し、台湾旧慣調査事業を主導した¹⁴⁾。これに関し、岡松は、「予か台湾旧慣調査の大任を終了し民事立法の難事を完成するを得たるもの、偏に石坂、雉本二君の賜にして而して大半實に是石坂君の功なりき」¹⁵⁾と述べている。

もっとも、京都帝国大学法科大学の改革は挫折する。1907（明治40）年1月17日の教授会で、井上密らの提案による、論文試問の廃止、在学年限を4年に戻すことなどを内容とする法科大学規程改正要綱が審議された。岡松らは、なお論文の存置を提案したが否決され、原案が可決された。同年2月4日高根義人は退官し、同年5月10日に織田萬は法科大学長を辞任した。岡松は、同年7月1日に、南満洲鉄道株式会社（満鉄）の理事に就任し、民法講座は石坂が担当することとなった。

満鉄理事就任について、若干、補足しておこう。岡松は、京大教授のまま、満鉄理事となった。そして、南満洲鉄道株式会社ノ職員ト為リタル官吏ニ関スル件（明治39年勅令第209号）により、「在職官吏ニシテ南満洲鉄道株式会社ノ職員ト為リタル者」については、外国政府ニ聘用セラレタル官吏ニ関スル件（明治37年勅令第195号）が準用され、満鉄職員である間は、臨時に、その官職が増置されたものとされる。なお、満鉄

13) 改革については、潮木守一『京都帝国大学の挑戦』（講談社、1997年）、京都大学百年史編集委員会『京都大学百年史：部局史編 1』（京都大学後援会、1997年）244頁、西山伸「創立期京都帝国大学法科大学と岡松参太郎」浅古弘・和仁かや編『岡松参太郎の遺緒』（成文堂、2024年）92頁を参照。

14) 浅古・前掲注(8)「岡松家旧蔵資料の公開」10頁。

15) 岡松参太郎「亡友石坂君を挽し併せて其遺著債権法大綱に序す」3頁（石坂音四郎『債権法大綱』（有斐閣、1917年）の序文）。

在職中、官吏としての俸給は停止され、その他の給与は支給されない。京都帝国大学官制（明治30年勅令第211号）を見ると、1907年の改正により、教授は専任98人とされている。岡松が満鉄理事に就任したことにより、京大には、教授が1人臨時に増置されたことになる。

もっとも、岡松は、満鉄理事就任後、大学運営への実質的な関与はしなかったようであり、「満鉄理事就任をもって、岡松の大学人としての活動は事実上終わりを告げたと言ってもよい」¹⁶⁾とされる。大正2年勅令第297号によって、満鉄職員に特例を定める明治39年勅令第209号が、1913（大正2）年12月31日限り、廃止されることになり、岡松も同日付で、京大教授を辞職している¹⁷⁾。

1914（大正3）年1月、岡松は、満鉄理事も辞任し、同年3月、東京市牛込区に転籍している。同年3月25日、岡松は、京都法学会から『法律行為論（法律学経済学研究叢書第14冊）』を出版している。本件書簡は、この翌年のものである。

1916（大正5）年、岡松は、同じく京都法学会から『無過失損害賠償責任論（法律学経済学研究叢書第18冊）』を出版した。1919（大正8）年、中央大学教授に就任。1921（大正10）年、死去。

（2） 織田 萬

行政法学者であり、関西大学学長、常設国際司法裁判所裁判官、貴族院議員、立命館名誉総長を務めた。明治元年、現在の佐賀県で生まれた。

1892（明治25）年7月、帝国大学法科大学仏法科を卒業し、大学院に進学した。同期卒業には、後に京都帝国大学法科大学で同僚となる、岡村司（仏法科）や高根義人（英法科）がいる。1896年、織田は、前述

16) 西山・前掲注(13)「創立期京都帝国大学法科大学と岡松参太郎」99頁。

17) 浅古・前掲注(8)「岡松家旧蔵資料の公開」7頁は、「大正2（1913）年制度変革（大正2年勅令第297号）により京都帝国大学教授を辞し」たとする。

の通り、新設の京都帝国大学法科大学の教授となるべく、岡松らとともに、留学を命じられる。

1899年8月に帰朝し、岡松同様、京都帝国大学法科大学の開設と同時に、その教授に就任した。1901年1月、京都帝国大学法科大学長に補され¹⁸⁾、教育改革を主導する。もっとも、1907年、改革は挫折し、同年5月10日、織田は、法科大学長を辞任することとなる。織田は、改革の挫折後も京大教授であり続け、大学運営にも関与した。1919年には、病気の雫本朗造に代わって、法科大学長事務代理・法学部長代理を務めた¹⁹⁾。また、前述の通り、関西大学学長や常設国際司法裁判所裁判官を兼任した。

1930（昭和5）年12月26日京大教授を退任し、翌1931（昭和6）年8月、貴族院議員に勅撰される。1945（昭和20）年5月26日、東京大空襲により死去。

織田は親しみやすい人物であったのか、本件書簡にも、織田が石坂から相談を受けたことが現れているほか、末川博は初授業に際して織田に励まされたと述べている²⁰⁾。また、常設国際司法裁判所裁判官時代、ヨーロッパを訪れた学者とのエピソードも多数残っている²¹⁾。

18) 織田の法科大学長就任前は、総長の木下広次が法科大学長事務取扱を兼任していた。

19) 大正8年勅令第12号により、帝国大学令が改正され、同年4月1日より、帝国大学は学部制を採用することとなった。

20) 末川は、初めて授業を担当することになった際、「学校を出てからまだ一年もたっていない私には、教壇に立つ自信がなかった。そこで、平素から世話になっている織田萬先生のところにいて、自分には講義をするほどの研究ができていないので自信がないから、断ろうかと思うていると告げた。ところが、先生は『教えるは習うのはじめ、マアやってみろ』とはげまされた。」（末川博『彼の歩んだ道』（岩波書店、1965年）193頁）。

21) 末川・前掲注(20)『彼の歩んだ道』211頁は、末川が国際連盟の部会に「織田萬先生につれられて傍聴に行った」「会議のあと、織田先生の招きで（引用注－当時国際連盟の事務次長であった新渡戸稲造と）夕食を共にした」という。座談会Ⅰ「京都大学初期の先生たち」書齋の窓71号1頁（1959年）2頁には、（瀧川幸辰）「わたしが留学してパリに着いたときに織田先生が迎えに来てくださってね。案内してくださった」、（恒藤恭）「留学中にヘーグに行つたとき・・・平和宮なんかを案内していただいた」との発言がある。

（3） 石坂音四郎

前述の通り、学説継受期の代表的な民法学者である。

1877（明治10）年12月9日、熊本県上益城郡上島村（現在の嘉島町の一部）に生まれる。1902（明治35）年7月、東京帝国大学法科大学独法科を首席で卒業した。同月28日、京都帝国大学法科大学講師を嘱託される。翌1903年（明治36）5月27日には助教授に就任し、さらに、同年7月30日、ドイツ・フランスへの留学を命じられた。助教授時代に、岡松とともに担当した、京都法政大学²²⁾の講義録²³⁾『民法債権総論（京都法政大学第1期第2学年講義録）』²⁴⁾が残っている。

1907年4月に帰朝。同年5月14日に教授に就任した。前述の通り、京都帝国大学法科大学の教育改革が挫折した時期である。同年7月の岡松の満鉄理事就任に伴い、石坂が京大の民法講座の担当になる。1915（大正4）年7月31日、前年に死亡した川名兼四郎の後任として、東大に転任する。本件書簡は、この東大転任に関するものである。

1917（大正6）年4月21日、石坂音四郎は、急死した。その死を悼んで、岡松は、石坂の遺著『債権法大綱』に42頁にも及ぶ序文「亡友石坂君を挽し併せて其遺著債権法大綱に序す」を寄せている。

（4） 雫本朗造

民事訴訟法学者であり、愛知県の鳴海小作争議で知られる。

22) 京都法政大学は、現在の立命館大学の前身となる専門学校。1900（明治33）年に京都法政学校として開校し、1904（明治37）年に京都法政大学と改称した。「京都法政学校は京都帝大の教授とともに計画・創立され、講義もほとんど京都帝大法科大学の教授・助教授によって」行われた（久保田謙次「京都法政学校の校外生制度と講義録－明治時代の本学の教育制度の一面－」立命館史資料センター紀要4号262頁（2021年））。

23) 京都法政学校・京都法政大学は、校外生制度を設け、通信教育を行っていた。講義録は、いわば通信教育のテキストである。

24) 表紙には「民法債権総論全」とある。国立国会図書館デジタルコレクション所蔵書誌 ID 000000443313。

1876（明治9）年1月11日、母雫本ひろの子として生まれる。父親は、雲水という僧侶とも、松山長三郎・松山長次郎とも言われる²⁵⁾。いずれにせよ、雫本姓は、母親の氏であるとする点で一致している。朗造の出生地も諸説あるが、愛知県愛知郡鳴尾町荒井（現在の名古屋市南区鳴尾町）で、母方の祖母に養育されたとする点は共通している。この混乱が示すように、雫本朗造は、大変困窮した中、幼少期を送ったようである。

1899年東京帝国大学法科大学独法科に入学し、1903年7月首席で卒業した（恩賜の銀時計を受ける。）。同月23日司法官補となるが、翌8月京都帝国大学法科大学講師を嘱託される（司法官補は、1904年6月9日に免官）。1904年6月には、助教授に就任した。また、同年10月から1908（明治41）年2月まで、ドイツに留学した。1908年7月には、教授に昇任した。

前述の通り、雫本も、岡松の弟子とされ、1908年4月には、雫本も臨時台湾旧慣調査会の委員となっている。また、この頃の雫本は、「オーストリア民事訴訟法を積極的に参考にしながら日本の法改正を論じようとしている点で注目される」²⁶⁾ という。

1918（大正7）年8月2日、雫本は、京都帝国大学法科大学長に補された。もっとも、前述の通り、病気のため、織田萬が事務代理・法学部長代理を務め、雫本自身、1919年6月6日に依願により法学部長を免じられている。同年、雫本は、郷里で起こった鳴海小作争議に関与するようになる。雫本は当初話し合いでの解決を目指したようだが、失敗し、

25) 古賀保夫「ある小作争議指導者の生涯」中京大学教養論叢20巻2号365頁（1979年）362頁は、雫本の父親を雲水とし、松山長三郎とする説を退ける。一方、堀崎嘉明『評伝 雫本朗造－地域と知の形成』（風媒社、2006年）161頁は、雫本の父親を、元犬山藩士の息子松山長次郎とする。

26) 上田理恵子「大正期の法律家によるオーストリア民事訴訟法の受容過程－大正15年における民事訴訟法改正と雫本朗造－」一橋研究23巻1号67頁（1998年）74頁。

小作人を指導して、永小作権の確認を求める反訴を提起し、法廷闘争を行った。

1922（大正11）年3月13日深夜、雄本は、瀬戸内海を航行中の宮島丸から行方不明となった。同月17日、海岸に漂着した雄本の遺体が発見された。自殺、他殺、事故死いずれとも不明である。

3 書簡／石坂・岡松の東京大学への就職の件

(1) 作成日及び作成者、相手方

日付について、書簡自体には、「四月廿八日夜」との記載がある（年の記載はない。）。封筒表面には、「4. 4. 29」「前10-11」との消印が切手にかかるように押されている。そのため、1915（大正4）年4月28日頃本件書簡が作成され、同月29日に郵便局が受け付けたものと考えられる。なお、封筒表面には、先述の消印と別に、牛込郵便局の「4. 4. 30」「前9-10」と見られる証示印がある。宛先住所として「東京牛込区市ヶ谷仲之町五十六」との記載があることから、牛込局は配達局であり、この書簡は、1915年4月30日に牛込局で扱われ、その頃、配達されたものと考えられる。

作成者は、本件書簡には、「萬」とだけ記載されている。封筒裏面には、「織田萬」との記載があることから、「萬」は織田萬を指すものであろう。

相手方は、本件書簡には、「岡松大兄」と記載されている。封筒宛先に「岡松参太郎」との記載があることから、「岡松大兄」は、岡松参太郎を指すものといえる。

(2) 内容

本件書簡に段落は存在しないが、便宜上、3つに分割して説明する。
なお、本件書簡の全文は、本稿末尾に掲載する。

ア 石坂からの相談

(ア) 本件書簡は、「進啓」とした後、直ちに、本題に入っている。

「昨日石坂君相見東京大学ニ於て同君招聘之内意有之趣にて自分も素望相叶事なれば此際転任を切望すれども・・・」と続く。

「昨日」は、本件書簡作成の前日、1915年4月27日のことであろう。「石坂君」は岡松の愛弟子であり、本件書簡の約3ヶ月後に、実際に東大に転任することとなる石坂音四郎を指すものと考えられる。「同君」も石坂のことである。

1915年4月27日、石坂が織田のところを訪れた。東京大学で石坂を招く、つまり、石坂を東大教授として採用するとの、内々の意向があったようである。石坂は、素望（普段からの望み）が叶うことになるので、この際、東大への転任を切望するという。

(イ) もっとも、書簡は、「切望すれども」に続けて、「先年相伺候所に依れば大兄之御就任も整案と相成居候様被存候ニ付萬一自分之転任運動が競争之姿とも相成候てハ不本意至極に有之就てハ大兄之事情其後如何承知不致居候哉との話に有之候へ共」という。

「先年」とあるが、岡松は、本件書簡の2年前に当たる1913年12月31日付けで、京大教授を辞職している。石坂が「先年相伺候所」というのは、辞任の際の話かもしれない。文脈から、「御就任」は、東大教授への就任であろう。

石坂は、先年伺ったところによれば、岡松の東大教授就任も実現するようであり、万一、石坂自身の東大転任と競合し、両者がポスト争いをする事になってしまつては、「不本意至極」とであるといい、岡松の事情がその後どうなったのか承知していないかと、織田に尋ねている。石坂

は「競争」は「不本意至極」といい、岡松の事情を尋ねていることから、石坂としては、岡松の東大教授就任の邪魔をするつもりはなく、かつ、仮に岡松の邪魔になるのであれば、自分自身の東大転任は辞退するという趣旨であろう。

（ウ） このような石坂の相談に対して、織田は「小生も別に其度之御消息を審にせずいづれ近日其辺之事御尋申上又石坂君に競争之意□頭無之事も跡明致し事情滞礙せぬ様取計可申為束致置候」と返している。

織田は、石坂に対し、「御消息」、つまり、岡松の事情を明らかにしなかったという。織田が岡松の近況を知っていて石坂に言わなかったのか、それとも、そもそも知らなかったのかは不明である。織田は、その上で、石坂に、いずれ、近日中に、その辺の事情を岡松に尋ね、また、石坂に、ポスト争いの意思が全くないことを明らかにするように取り計らうと約束している。

イ 石坂は東京に向かう

（ア） 書簡は、「然る處」として、「先刻同君よりの来書に依れば目下雉本君も東上中に付相携て御熟談致方好都合ならんとて今夕急ニ東上之事ニ決したる由ニ有之」という。

「先刻」は、本件書簡の作成日である1915年4月28日であろう。「昨日」とは状況が異なっている。「同君」は石坂のことである。「雉本君」は、石坂と同じ、岡松の愛弟子である雉本朗造を指すものと考えられる。

先ほど、石坂からの手紙が織田のところに届き、そこには、雉本が東京に向かっているので、雉本と協力して、岡松と熟談の方が好都合だろうとして、今日の夕方、石坂も東京に向かうことに決めたということが書かれていたという。

ここで気になるのは、「熟談」の目的であるが、これについては、後述する。

(イ) 書簡は、石坂からの「来書」に言及した上で、「さすれば委曲ハ両君より直接に開陳に致只小生ハ石坂君が大兄ニ対する関係上苦心致居候事のみ跡明致候」という。

そうであれば、詳細は、石坂・雉本から、直接、岡松に説明することにする。織田としては、石坂が岡松に対する関係上悩んでいたことだけ明らかにするという。

ウ 織田の希望

書簡は、「此際大兄之進退も相定俱二手を携て東京大学之講座を占領せられ候ハゞ学界の慶事にして同大学之光彩を添へんかと切望致居候」という。

「講座」は、岡松・石坂が民法学者であることから、民法講座であろう。

この際、岡松の身の処し方も定め、石坂とともに手を携えて、東京大学の民法講座を占領すれば、学界にとっても喜ばしく、東京大学の「光彩」を加えることになる、織田は切望しているという。

(3) 検討

この書簡の半分以上は、石坂からの織田に対する相談である。織田は、石坂に、東大教授のポストをめぐる、岡松と争う意思はない旨を繰り返しており、織田自身も言及しているように、書簡の意図としては、この点を明らかにすることが大きいものと思われる。

興味深い点としては、石坂が「好都合」として、雉本とともに、行おうとしている「熟談」の内容を挙げることができる。

本件書簡の前半の、石坂の織田に対する相談では、石坂は岡松の事情を尋ねているが、これは岡松とのポスト争いが「不本意至極」であるとの理由であった。しかし、岡松の動向を確認し、石坂が、東大転任を承諾するか辞退するかを決めるのであれば、雉本を巻き込む必要はない

だろう。石坂が雫本と「相携て御熟談致方好都合ならん」との文章からは、元々、石坂や雫本は、岡松と、しっかり相談したいことがあったことを推測することができる。それは石坂1人では難しいことであり、「好都合」とみると、わざわざ京都から東京に向かうほどの重大な事項と推測することができる。本件書簡では明言されていないが、織田が岡松も東大教授に就任するように勧めていることも考えると、「熟談」の目的は岡松の大学復帰ではないだろうか。前述の通り、岡松は、京大を辞め、満鉄理事も辞めている。研究は続けており、なんなら本も出しているが、岡松の周囲としては心配する気持ちが強かったのではないか。岡松の業績を考えれば、（東大であるかはともかく）大学教授のポストを得ること自体は難しくなかったものと思われる。それゆえ、岡松がどこの大学にも就職しなかったことは、岡松自身の意思によるものであり、岡松の大学復帰のためには、岡松自身の意欲が最大の問題だったのではなかろうか。そうだとすれば、石坂は、雫本とともに、岡松に大学に復帰するよう説得する意図で東京に向かったものと考えられる。

なお、当時の岡松の周囲の状況としては、岡松の恩師とされる穂積陳重は、在職30年を機に辞任する旨を表明し、1912（明治45）年3月4日、東大を退官している。穂積は1916（大正5）年に枢密顧問官に就任するが、本件書簡の当時は、目立った職には就いていないようである²⁷⁾。一方、岡松の弟である井上匡四郎は、1912（大正元）年8月9日、京都帝国大学理工科大学教授から、東京帝国大学工科大学教授となっている。

「熟談」については資料がないが、本件書簡が差し出されたのは1915年4月29日であり、同年5月には、東京帝国大学法科大学教授会は、「京都法科大学石坂音四郎教授の本学への転任の件を可決」²⁸⁾している。この間

27) 学士院の会員ではある。

28) 東京大学百年史編集委員会編集『東京大学百年史 部局史一』（東京大学、1986年）151頁。

の時間がないことを考えると、本件書簡の直後に、石坂は東京に向かい、「熟談」して、岡松は東大教授となることを希望せず、石坂が東大教授となる旨の結論となった可能性が高いといえよう。

ところで、織田は、岡松と石坂で東大の民法講座を「占領」せよというが、それが可能であれば、そもそも、石坂が岡松との「競争」を心配しているのは杞憂に過ぎないこととなろう。果たして、そのようなことは可能だったのだろうか。これに対する答えは持ち合わせていないが、結果を見ると、1915年に、東京帝国大学法科大学教授に就任した者は、石坂1人だけである²⁹⁾。

<資料>書簡全文 ※原文縦書き

進啓昨日石坂君相見東京
大学ニ於て同君招聘之内意
有之趣にて自分も素望相叶
事なれば此際転任を切望すれ
ども先年相伺候所に依れば大
兄之御就任も整案と相成居候
様被存候ニ付萬一自分之転任
運動が競争之姿とも相成候てハ
不本意至極に有之就てハ大兄
之事情其後如何承知不

29) 東京大学百年史編集委員会編集・前掲注(28)『東京大学百年史 部局史一』150頁。ただし、1916(大正5)年には、鳩山秀夫と穂積重遠が、ともに、助教授から教授に昇任している(それぞれ、民法第四講座、民法及び法理学講座担当)。また、同年、三潁信三も助教授から教授に昇任している(独逸法講座担当)。そのため、1915年時点では、民法講座の教授ポストには、若干の余裕があるものの、既に昇任予定の者がいたということかもしれない。

致居候哉との話に有之候へ共小生も
別に其度之御消息を審にせず
いづれ近日其辺之事御尋申上
又石坂君に競争之意□頭無之 ※□は毛か
事も跡明致し事情滞礙
せぬ様取計可申為束致置候然る ※為は約か ※束は、上に草冠
處先刻同君よりの来書に依
れば目下雉本君も東上中に付
相携て御熟談致方好都合
ならんとて今夕急ニ東上之事ニ
決したる由ニ有之さすれば委
曲ハ兩君より直接に開陳に致
只小生ハ石坂君が大兄ニ対する
關係上苦心致居候事のみ
跡明致候此際大兄之進退も
相定俱ニ手を携て東京大学
之講座を占領せられ候ハ、
学界の慶事にして同大学之
光彩を添へんかと切望致居候
先は御急書致期御意度

恐惶謹言

四月廿八日夜

萬

岡松大兄

硯北